

平岡 和¹: 報告—20th Conference of the International Workgroup for Palaeoethnobotany (IWGP2025) 参加記

Nodoka Hiraoka¹: Report—Participating in the 20th Conference of the International Workgroup for Palaeoethnobotany (IWGP2025)

International Workgroup for Palaeoethnobotany (IWGP) は3年ごとに開催される植物考古学・古民族植物学の国際会議である。筆者は2025年7月21日～25日開催の第20回目の会議(IWGP2025)に参加し、ポスター発表を行った。また、26日開催の巡査へ参加したので報告する。本会議への参加は、チェコで開催された第19回会議(IWGP2022)に続く2度目である。

IWGP2025では、オランダ北東部に位置するフローニンゲンのUniversity of Groningen(図1)を会場に、口頭発表(133件)とポスター発表(111件)による成果発表(図2)、ラボセッション、倫理的方針に関する発表と討論(Ethics & IWGP Research groups)、ラボツアーなどが行われた。

成果発表は12のセッション

1. Wild plant use
2. Method development within archaeobotany
3. Beyond research archaeobotany
4. Exploring the archaeobotany of food
5. Archaeobotanical data
6. Plant management, plant cultivation & resilience
7. Traditional ecological knowledge & archaeobotany
8. Global plant domestication
9. The archaeobotany of settlements and urban



図1 IWGP2025のメイン会場となったUniversity of GroningenのAcademy Building。



landscapes

10. Innovations and legacies in medieval agriculture
11. Movement of plants
12. General session

に分類され、口頭発表はメイン会場とパラレル会場に分かれて実施された。

個人的な関心から、セッション7で発表されたT. Majerovičová氏らの研究を紹介したい。同グループは木材遺体の分析に加え、民族植物学的な調査を実施し、建築材や薪として用いられる樹種とその選定基準を記録した。その結果、柔軟性や耐久性といった実用的な特徴のみならず、文化的・精神的な要素も木材の選択に大きく影響していることをCultural importanceという指標を用いて可視化し、考古植物学におけるTraditional ecological knowledgeの重要性を改めて示した。このように、考古資

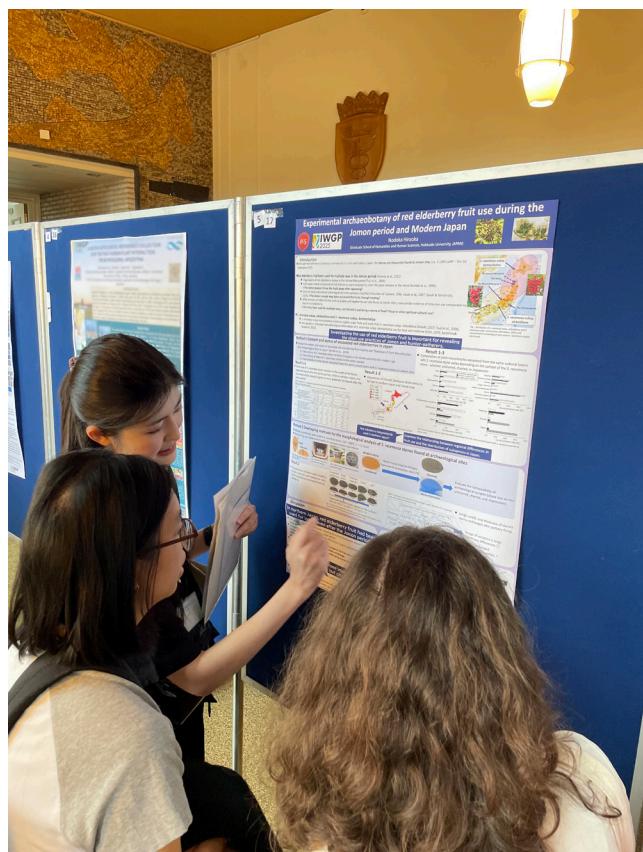


図2 ポスター発表の様子（那須浩郎氏提供）。



図3 Archaeobotanical laboratory に所蔵される種実標本 (M. Schepers 氏の許可による掲載)。

料の分析に留まらず、植物利用の現地での聞き取り調査など民族植物学的な研究も重視し、植物利用を多面的に理解しようとする研究は他のセッションにおいても少なくなかった。

Ethics & IWGP research groups では、前半に、前回会議の後に発足した IWGP の傘下の 2 つの研究グループ Analysis of archaeological food remains と Early plant management & domestication in SW Asia の活動報告があった。後半では、会議前に実施された研究に関するアンケートの集計結果を踏まえた今後の IWGP の倫理的方針に関する発表と討論が行われた。研究資金不足やハラスマント等は考古植物学のみならず、多くの学問に共通の課題だが、考古植物学に特有と思われる課題として、植物試料へのアクセスの困難さ、考古植物学の研究が非専門家によって実施される場合もあること、博物館における考古植物学分野の展示が不十分であることなどが指摘された。この発表と並行して開催されたラボセッションでは、参加者が持ち寄った資料の同定などが行われた。

ラボツアーは 3 回に分けて実施され、各回 10 名程度の少人数で Archaeobotanical laboratory を見学した。研究所には種実・木材・花粉の標本が収蔵され、植物をモチーフにしたカードゲームのコレクションも展示されていた。とりわけ、3 万 3 千点以上の種実標本は少なくとも 3 部屋以上に所蔵され、瓶詰の種実が標本箱にぎっしりと並ぶ光景は壮観であった(図3)。

各セッションの間には恒例のコーヒーブレイクがあり、会議の初日にはハーレン植物園でアイスブレーカーが行われた。最終日前夜には、約 800 年前に建てられた教会 Akerk を会場に夕食会とダンスパーティーが催されるなど、



図4 University Museum Groningen 内の考古植物学の展示の入り口 (M. Schepers 氏の許可による掲載)。

参加者同士の交流の機会も多く設けられた。筆者も日本の恩師やこれまでの学会大会、留学先等で知り合った研究者らと再会できた。研究を通じて出会った人々との縁を今後も大切にしたい。

休憩時間には、大学の博物館で “Planting the Past—Archaeobotany in Groningen” という考古植物学の展示を見学した(図4)。本展示は 2026 年 1 月 5 日まで開催される予定である(Hondelink et al., 2024-2025)。

今回の会議から新たに The IWGP Lisa Lodwick Award が設けられ、E. Karoune 氏が受賞した。この賞は 2022 年に逝去した考古植物学者 L. Lodwick 氏の名前を冠し、考古植物学分野を批判的に見つめ、課題改善への取組を通じて分野の発展に前向きな影響を与えた人物を対象としている。

26 日の巡検は Clay excursion と Sand excursion の 2 つのコースから選択できた。筆者は Sand excursion に参加し、フローニンゲンの南に位置するドレンテ州の Balloërveld や Dwingelderveld National Park を訪問した。Balloërveld では、考古学者の S. Arnoldussen 氏の案内のものと、考古



図5 Balloërveld に生育する *Erica tetralix* とギヨリュウモドキ *Calluna vulgaris*.



図6 Dwingelderveld National Park で放牧される羊の群れ。

遺物を手に取りながら砂の堆積層を見学し、ヒースランドを構成する *Erica tetralix* やギヨリュウモドキ *Calluna vulgaris* (図5) を観察した。Rolde で昼食をとった後は、生態学者の H. Dekker 氏の案内で Dwingelderveld National Park を歩き、公園内に生育する植物を観察した。公園内では羊飼いが羊の群れを管理しており、羊が草をはむ様子も見られた(図6)。ヒースを餌とする羊はかつて糞を堆肥として利用するために飼育され、今日ではヒースの草地化を防ぐために飼育されており、Dwingelderveld のヒースランドの景観の一部を成している (National Park Dwingelderveld, 2025)。

次回は2028年6月にドイツのベルリンで開催予定である。

末筆ながら、今回の国際会議参加費の一部は日本植生史学会からご支援賜りました。深く感謝申し上げます。

引用文献

- Hondelink, M. M. A., Smit, S. & Heiss, A. G. 2024–2025. IWGP 2025—20th Conference of the IWGP, Groningen, The Netherlands. <https://archaeobotany.org/iwgp2025/> (2025年8月閲覧).
National Park Dwingelderveld. <https://www.nationaalpark-dwingelderveld.nl/> (2025年8月閲覧).
(¹〒060-0810 札幌市北区北10条西7丁目 北海道大学大学院文学院考古学研究室)